

イチゴの持続的農業の推進と県育成品種の導入促進

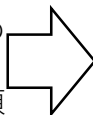
要約

アブラムシ類やアザミウマ類は、薬剤感受性低下が著しく、化学農薬だけで防除するのは困難となっている。また、プランターやトレイなどの育苗資材は、炭そ病菌や萎黄病菌による汚染回避のため、使用前の消毒が必須である。そこで生物農薬による病虫害の総合防除と病害の物理的防除（温湯消毒技術）の導入により、管内のイチゴ産地の持続的農業を推進した。

また、春先に日持ち性が悪いために単価が極端に低下する‘アスカルビー’に代わる量販店向け品種として日持ち性が良好な県育成品種‘奈乃華’の導入を推進した。

現状(背景)と課題

- ・ アブラムシ類、アザミウマ類の化学農薬のみによる防除は困難
- ・ 炭そ病・萎黄病対策として資材消毒が必須
- ・ 春先に日持ち性が劣る‘アスカルビー’に代わる品種への期待



目標

- ・ アブラムシ・アザミウマ天敵導入件数 15件
- ・ 育苗資材の更新・温湯消毒実施件数 20件
- ・ ‘奈乃華’栽培面積 180a

活動内容

- ・ アブラムシ類の生物農薬に関しては、研修会を通じて効果的な活用方法を周知。
- ・ アザミウマ類に関しては、生物農薬の効果が安定しないため、病虫害防除所と連携し、実証圃を設置し、その結果を研修会を通じて生産者に情報共有。
- ・ 県のリーディング事業を活用し、温湯消毒機を奈良市地区網室に1台、天理市に1台、平群町に1台導入。その結果を研修会で情報共有。
- ・ ‘奈乃華’の栽培上の課題解決に向け実証圃を設置し、その結果を研修会等で共有。

成果

- ・ アブラムシ類の生物農薬の効果的な使用方法を利用する生産者に周知できた。
- ・ R6年度の実証で、2月～3月のハウス内でのヒラズハナアザミウマの発生が、ハウス外からの新たな侵入ではなく、ハウス内越冬個体に起因することが判明。R7年度は生物農薬と化学農薬との効果的な防除体系について実証調査。
- ・ ‘奈乃華’の栽培面積は、取組開始後2カ年は、‘アスカルビー’からの品種転換により増加したが、R7年度は、市場価格が高い‘古都華’と、病害防除が容易な‘ゆめのか’に、再び転換する生産者が現れ、減少した。一方で、直売を行う経営体が、「奈良県オリジナルイチゴ品種」を求める県外からの来訪者や県外飲食店に対する品揃えとして、‘奈乃華’を栽培する事例があり、今後も同様の利用が新たに行われる可能性がある。



北部農業振興事務所農業振興課
担当：農産物ブランド推進第1係
吉村あみ・西本登志

みどりの食料システム戦略緊急対策交付金
(グリーンな栽培体系サポート事業)

普及活動のポイント

- ・ **生産者の理解を得る“見える化”**：技術導入にあたって現地実証で結果を示すことにより生産者の理解が進んだ。現地に普及指導員が定期的に足を運ぶことで産地の課題に取り組む姿勢を示すことができた。
- ・ **関係機関と連携した普及活動**：病害虫防除所との連携でアザミウマ類の現場での動向を生産者とともに確認できた。また、県育成品種‘奈乃華’の心止まり対策や土耕栽培での果実の傷防止策など、研究機関と連携し、素早く現場へ技術（二芽管理、不織布のマルチ上への展張など）を伝えることができた。

対象の変化

- ・ 生物農薬の効果的な使い方を理解することで、ハダニ類やアブラムシ類の総合防除による安定した防除効果が得られるようになった。また、温湯消毒機の共同利用の導入が進んだ。一方、個人での導入も見られ、資材消毒の必要性が認識された。
- ・ ‘奈乃華’を導入した生産者は、課題対策技術に関する情報を受けると、速やかに技術導入した。

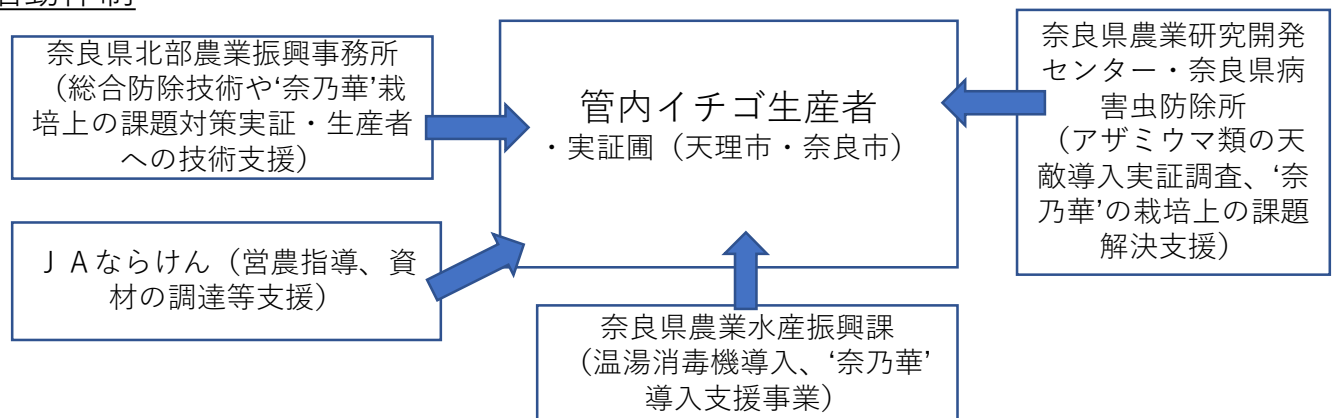
対象者からのコメント

- ・ 生物農薬を活用した総合防除は、労力の削減にもつながるので、今後も技術導入支援をお願いしたい。
- ・ ‘奈乃華’は輸送性に優れ食味も良い品種。市場で正当に評価されるようになれば、栽培する人が増えるだろう。

これからの活動ビジョン

- ・ 総合防除に関する情報提供は引き続き行う。
- ・ アザミウマ類の総合防除については実証圃での結果など新しい情報を提供予定。
- ・ ‘奈乃華’については、地区共計に取り組む生産者を中心に情報提供するなど、引き続き支援を行う。

活動体制



用語解説

- ・ 総合防除：化学農薬だけに頼らず、物理的、生物的、耕種的な手法を組み合わせ、環境負荷を抑えながら病害虫や雑草を、経済的被害の出ないレベル以下に管理する持続可能な農業手法。
- ・ 心止まり：生長点（株の中心にある芽）が消失・停止し、新しい葉が展開しない生理障害。